エドワード・アビィと「場所の感覚」
—アメリカ南西部における荒野体験—

星野　勝利

I am not an atheist, but an earthiest.
—Edward Abbey, *Desert Solitaire*

はじめに

青年は荒野を目指す。馴染みの場所を後にして人はしばしば未知の世界に向けて旅立つ。これが顕著に認められるのが青年期である。荒野とは青年が向かう未知の世界の別称にほかならない。この世界は馴致された日常的場所としてではなく、非日常の荒々しく困難な世界としてしばしば意識される。旅立つ青年の意識に現前する困難な未知の世界、それが荒野である。

1832 年、ボストン第二教会の牧師職を辞したエマソンは、クリスマスの日にヨーロッパに旅立つ。住み慣れたニューイングランドの地を後にして、29 歳のエマソンは、マルタ島から、ナポリ、ローマ、ヴェニス、ミラノを経てパリに入る。パリの植物点では、ものと精神の対応関係について啓示を得る。ロンドンではコールリッジを訪ね、エディンバラではカーライルを訪ねる。青年エマソンは、転地療養や説教のため、アメリカ南部、ニューハンプシャー州、コネチカット川渓谷など、たびたび旅に出ている。しかし、教会制度への懐疑の念を胸に牧師職を辞してヨーロッパに向かったこの旅は、精神的意味においては恐らく荒野を目指す青年の旅であっただろう。

エマソンの姿勢は、1841 年、捕鯨基地ニューベドフォードから捕鯨船に乗って海に出る青年メルヴィルや、1845 年、ウォールデン湖畔の小さな小屋で独居生活を始める青年ソーローに受け継がれる。時代を少し下った 1867 年、聖書とバーンズとミルトンの詩集と「ジョン・ミュア、地球/惑星、宇宙(John Muir, Earth-planet, Universe)」(Turner,131)と記された携帯ノート一冊をバッグに詰めこんで中西部の町インディアナポリスから南部メキシコ湾を目指した青年ミュアの旅も、エマソンの旅と無縁のものとは思われない。

エマソンに代表されるこれらの旅は、若者の旅として、自己発見や自己救済のための個人的旅である可能性もある。文明や文化と関わるものである可能性もある。いずれにしろ、さらに時代を下った 20 世紀後半のアメリカで、これらに続

くどのような例を挙げることが可能であろうか。その旅は、先達のそれと比べた場合、どのような特質を持つものなのか。

1．砂漠のトレイル

アパラチア山脈の中の小さな町に生まれた一人の若者が西に向かって旅立つ。ヒッチハイクで車に乗り込んだ若者の目の前に、やがて西の世界の赤茶けた大地の光景が拡がる。眼に飛び込んできたその世界は、単にそこにあるだけで神秘的な力をたたえた可能性に満ちた世界であった。

> Proud of my freedom and hobohood I stood in the doorway of the boxcar, rocking with the motion of the train, ears full of the rushing wind and the clattering wheels, and stared and stared and stared, like a starving man, at the burnt, barren, bright landscape passing before my eyes....And all of it there, simply there, neither hostile nor friendly, but full of a powerful, mysterious promise (Duryee)

後の作家 Edward Abbey (1927-1989) は、17 歳の高校生の時、ペンシルバニア州の田舎町からアメリカ西部に向かう。予想される徴兵を前に、体験しておくべき世界として若者が選んだのはアメリカ西部であった。イリノイからミネソタ、サウス・ダコタ、ロッキーを越えてカリフォルニアに辿り着いた若者は、ヨセミテを訪ね、シエラネバダを眺める。アルバイト生活を経て、アリゾナ経由で故郷に引き返すことにしたアビィは、フラグスタッフからアルバカーキまで無賃で貨物列車を乗り継ぎ、そこから故郷のペンシルバニアまで、グレイハウンドバスのノンストップの切符を買い込み、帰郷する。1944 年のことであった。

「サボテンのエド (Cactus Ed)」(Duryee)と後に称される作家アビィは、若くして体験したアメリカ南西部を作品やエッセイの主たる舞台とする。*Desert Solitaire*(1968)や *The Monkey Wrench Gang*(1974)あるいは *The Journey Home*(1977)や *Down the River*(1982)など、代表的作品やエッセイは、そのほとんどがサボテンや砂漠や渓谷で代表されるアメリカ南西部である。アリゾナ州からユタ州南部、コロラド高原やモアブ砂漠、ソノラン砂漠、アーチズ国立公園などが、いわゆる「アビィ・カントリー (Abbey's country)」(Duryee) である。この世界をアビィはさまざまな角度から描き出す。砂漠の実態、生き物の姿、山や川の姿、気象のこと、植物のこと、動物のこと。アビィにとってアメリカ南西

部は特別の世界である。過酷な砂漠の世界は「生まれ育った故郷(natural native home)」に等しい。

> Arizona is a desert country...a hideous Sahara with few oases, a grim bleak harsh overheated sun-blasted God-damned and god-forgotten inferno....I am describing the place I love. Arizona is my natural native home. Nobody in his right mind would live there. (*The Journey Home*, 147)

19 世紀以降、アメリカでは様々な「トレイル (trail)」が整備される。オレゴン・トレイル(Oregon Trail)、サンタ・フェ・トレイル(Santa Fe Trail)、トレイル・オブ・ティアズ(Trail of Tears)など。歴史の歩みや通商の発展と深く関わるトレイルもあれば、アパラチアン・トレイル(Appalachian Trail)、ジョン・ミュア・トレイル(John Muir Trail)、パシフィック・クレスト・トレイル(Pacific Crest Trail)など、レクリエーションを主たる目的として整備されたトレイルもある。多様なトレイルの存在は、アメリカ的特性としての「移動(mobility)」との関係も指摘される(Embridge, 207)。

西に向かうアビィの旅は一種のトレイルの旅である。作品はこのことを随所で示唆する。たとえば *Abbey's Road* は、アーストラリア、メキシコ、アメリカ南西部の「死の谷」(Death Valley) など、アビィの多様な旅を語るものである。この語りは「道(road)」についての語りである。しかしこの「道」は多分に「トレイル」的性格を帯びている。「死の谷」で友と一夜を過ごしたアビィは、後にその旅を振り返る。そのとき思うのは「未踏のトレイル(The trail not taken)」(175)のことである。

東部から西部の砂漠に向かって「トレイル」を歩むアビィ。作家アビィにはこのような輪郭が浮かび出る。だがなぜ、極西部のカリフォルニア、ヨセミテやシエラネバダの山々ではなく、モアブの砂漠やコロラド高地の赤茶けた世界なのか。

理由の一つは、ヨセミテやシエラネバダは「乾燥度が不足していた (not dry enough)」(Callenbuch) からであった。もう一つ、より根源的な理由は、故郷アパラチアへの幻滅である。生い立ちの地アパラチアは、なるほど緑に覆われた美しい世界であった。しかし現実のその世界は原初の姿を喪失した欺瞞の世界でしかなかった。しかもその喪失に拍車をかけているのが、自分を含む現在の人間に他ならなかった。

> Something like a shadow has fallen between present and past, an abyss wide as war that cannot be bridged by any tangible connection, so that memory is undermined and image of our beginning betrayed, dissolved, rendered not mythical but illusory. We have connived in the murder of our own origins. (*The Journey Home*, 225)

故郷アパラチアの緑の世界の喪失感。これに耐えられなかった作家アビィは、サボテンと砂漠と渓谷の世界を目指す。これがやがて環境作家アビィを生み、同時に、環境テロリズム(ecoterrorism)、偶像破壊(iconoclasm)、外国人恐怖症(xenophobia)、無政府主義(anarchist)、女性嫌悪症(misogynist)等々、さまざまなレッテルを複雑に合わせ持つ特異な作家を生み出すことになる。

2．荒野の誘惑

1951 年、24 歳の青年アビィは、フルブライト奨学生として、エディンバラ大学に学ぶ。大学院生アビィは、小説 *Jonathan Troy* の執筆を試みつつ論文作成について思いを巡らす。論文題目は「無政府主義についての一般論(A General Theory of Anarchism)」。この完成のため、バクーニンやクロポトキンやトルストイなどを精力的に読むことを心に決める(Cahalan, 49)。

留学生生活を送るアビィは次第に街を幾重にも覆うスモッグの「暗さ (Dark)」と「重苦しさ (Grave)」に幻滅感を覚える。クリスマス休暇に旅したスペインでは、一分の隙もなく耕された土地や生活の場を囲い込む無数の壁の存在に、辟易して過ごす。さるコンサートでイギリス国歌を耳にしたアビィは強烈な「ホームシックと寂しさ(homesickness and loneliness)」に襲われ、故郷アメリカを思う。いまだ未完の国、醜悪さを抱えているものの「約束の地(a promise)」であるアメリカである。

> ....physical land, of the towns and farms, of the many folks I know---tragic with a sense of America as a promise yet far from complete, far from realization, and as a dream menaced by ugliness. (Cahalan, 50)

旧世界に旅立ったアビィは幻滅感を抱えて故郷に帰還する。「東」に向かう旅が「西」への帰還の旅となる。この旅は未完の国アメリカへの帰還の旅である。人

間の手の入らない未開の地を無数に抱え、人工の壁とは無縁の原初の世界を無限に内包する国アメリカへの帰還である。

高校生アビィは若くして「西」を目指した。西に向かうこのベクトルは、旧世界体験者としての帰還者アビィを更に衝き動かす。ユタ州南東部アーチズ国立公園管理人としての3年間の体験を描く *Desert Solitaire* (1968)は、帰還のベクトルの終着点が「砂漠 (desert)」であること、すなわち「荒野 (wilderness) であることをつぶさに語る。公園管理人アビィにいわせれば、「この世でもっとも美しい世界(the most beautiful place on earth)」(1) は、個人によって様々に変容する。人はだれでも、老若男女を問わず、心の中に「理想の場、正しい場、ただ一つの本当の家(the ideal place, the right place, the one true home)」(同) を抱えている。アビィの場合その場所はアメリカ西部の特定の一地域である。

> For myself I'll take Moab, Utah. I don't mean the town itself, of course, but the country which surrounds it----the canyon lands. The slickrock desert. The red dust and the burnt cliffs and the lonely sky----all that which lies beyond the end of the roads. (2)

コロラド川の川下り体験を記す作中の一章 "Down the River" は一種の "wilderness"論である。グレンキャニオン・ダムが造られたコロラド川について記すアビィは、同時に「荒野」について思いめぐらす。「荒野」ということばは、行政文書では「道路のない 5000 エーカー以上の隣接する土地(A minimum of not less than 5000 contiguous acres of roadless area)」(166)と定義される。このことばは、アメリカ人にとっては「音楽の響きを持つ(The word itself if music)」(同)。「失われたアメリカへの感傷的なノスタルジア(sentimental nostalgia for lost America)」(同)の響きである。アメリカ人が生を受けた「大地という子宮(the womb of earth)」(同)へのノスタルジアでもある。より具体的には「荒野」は次のような意味を内在させる。

> It means something lost and something still present, something remote and at the same time intimate, something buried in our blood and nerves, something beyond us and without limit. (166-7)

「荒野」とは何か。公園管理人アビィはさらに問う。現に自分が生きる世界、

「砂漠」としての世界、管理された「公園」としての世界は、他の世界と比べてどうなのか。差異があるのか、ないのか。

アビィが思うのは「海」と「山」である。ホーマーやメルヴィルやコンラッドは、「海」に惹かれた。一方、ペトラルカやルソー、あるいはロマン派の面々は、「山」に惹かれた。「砂漠」はどうか。なるほど砂漠の先達として、イギリス人ロレンス (T.E.Lawrence) やドーティ (C.M.Doughty) がいる。アメリカにもオースチン(Mary Austin)やヴァン・ダイク(J.C.Van Dyke)やステグナー(Wallace Stegner)やパウエル (J.W. Powell) がいる。しかし彼らの場合、「砂漠」の解明度はどの程度のものなのか。

アビィによれば、「砂漠」は、特別な場所である。「海」や「山」には、「本源的なものを感知させるもの (the sense of something ultimate)」(240) が内在する。しかし「砂漠」は、「無(nothing)」(同) である。ただ単に受け身で存在するだけの「存在という裸形の骸骨(the bare skeleton ob Being)」(同)である。他方、「海」は、帰還すべき「陸」を持ち、「山」は下るべき「下界」を持つ。すなわち、接続すべき「人間的環境 (a humane environment)」(241) である。しかし、本質的に「無」であり、「裸形の骸骨」でしかない「砂漠」は、「海」や「山」に存在するこの「人間的環境」が決定的に欠落する。アビィによれば「砂漠は心を持たない(the desert has no heart)」(243)。「人間の感覚では同化できない(the human sensibility cannot assimilate)」(242) 場所である。要約すれば「砂漠」に遍在するのは「ストレンジネス(strangeness)」である。これに触れたとき、人は砂漠の持つ特異な力に抗しがたく魅了され、「生の探求者(prospector for life)」となる。アビィはこれを「黄金の魅惑(golden lure)」と総括する。

> Once caught by this golden lure you become a prospector for life, condemned, doomed, exalted. (242)

3. 砂漠のコヨーテ

19 世紀後半の 1868 年、中西部インディアナからアメリカ南部に向かい、そこから更に西に向かった青年ジョン・ミュア (1838-1914) は、カリフォルニア東部に峰を連ねるシエラネバダの山に入る。山に入ったミュアは、氷河時代の面影を至る所に残す雄大なヨセミテの渓谷をつぶさに探索する。

ミュアが生きた場所をアビィは少なくとも二度訪ねている。1944 年、高校生アビィは、ヨセミテで「ミュアの光の山脈(John Muir's range of light)」(Cahalan,29) を眺め、フレズノで作家サロヤンの家を訪ねている。27 年後の 1971 年、44 歳のミュアは、雑誌 *Life* の依頼でヨセミテを再訪する (Cahalan, 138)。これらの訪問はアビィを満足させるものではなかった。高校生として訪ねたヨセミテは「乾燥度の不足」が気になる場所であったし、今をときめく *Desert Solitaire* の作者として訪れたヨセミテは、過度の開発により昔の姿を失った嘆かわしい場所でしかなかった。

作家ミュアに対してアビィは必ずしも親近感を示してはいない。「自然作家(nature writer)」と呼ばれるよりも「自然愛好者(nature lover)」と呼ばれることをアビィは望んでいたが、「自然」関係の必読作家としては、ソーロー、ミュア、フォークナー、ディラード、ツィンガー、オースティン、そしてカーソンなどを挙げている (Cahalan, 242)。ところが、アリゾナ大学創作コース教授でもあったアビィは、アリゾナ大学版 *Desert Solitaire* の前書きの中で、自分はミュアやバローの本は読んだことがないし、読むつもりもないと、ミュアやバローへの淡泊な姿勢を示している (同)。

これに比べると、ソーローへの思いは格段に濃密である。トレイブン (B.Traven) の西部劇とソーローの作品を学生時代から読み始めたとするアビィは、「特にソーローに強く影響された(I've been influenced very strongly by Thoreau) 」(Cahalan, 37)ことを認めている。実際、アリゾナ大学大学院での授業では、読むべきエッセイストとして、デディオンやベリーやディラードのような現代作家と共に、古典的作家として、モンテーニュやオーウェル、そしてソーローの名前を挙げている。シエラ・クラブ・トレイルカレンダー (1976 年) に掲載されたエッセイ "Walking" は、ソーローの同名のエッセイを視野に入れたものであり、音楽 (フルート演奏) に対する関心も、ソーローの模倣とする見方もある。レッテルの持つ限定的性格を当人は嫌ってはいたが、「アメリカ西部のソーロー(The Thoreau of the American West)」のレッテルがやがてついて回ることになるのは、やむを得ないところがある。

このソーローについて、さる川下りの際、アビィは深く思いをめぐらす。1980 年 11 月、ユタ州南部のグリーン・リバーをアビィは 5 人の仲間と 2 艘のボートで下る。この川下りには、実はもう一人の同行者がいる。「亡霊(the ghost)」(13) としてのソーローである。*Down the River* (1982) の一節 "Down the River with Henry Thoreau" は、この「亡霊」と向き合う旅人アビィの思いをつぶさに語

る。

砂漠に生きるアビィにとってソーローは、先師と呼ぶに相応しい存在である。19 世紀中葉ニューイングランドに生きたこの先人は、アメリカ西部を訪ねることはなかった。しかし、伝えられている最期のことばは「ムース、インディアン(moose...Indians...)」(17) であったというし、「世界の保存は野生の中にあり(In wilderness is the preservation of the world)」「自分が森の中を一人で旅をするのはホームシックにかかった者が家に帰るようなもの(I go to my solitary woodland walks as the homesick return to their homes)」(同) ということばを記したのも、ボストン近郊ウォールデン湖畔で独居生活を送った先人ソーローであった。ぼろぼろのペーパーバック版 *Walden* を防水用バッグに入れて川を下るアビィにとって、この人物は紛れもなく大いなる存在であり、先師と呼ぶに相応しい存在であった。

Thoreau's mind has been haunting mine for most of my life. (13)

しかし、先師たるべきソーローに対し、アビィは辛辣な目を向ける。路上で目撃した「権威を疑え(QUESTION AUTHORITY)という車のスチッカーのことばは、ソーローであれば、「つねに権威を疑え(ALWAYS QUESTION AUTHORITY)」と「つねに(always)」を加えて改変するはずである。しかし自分はこれを「常にすべての権威を疑え(ALWAYS QUESTION ALL AUTHORITY)」と、「すべて(all)」ということばを加えて改変するという。しかも、この「すべて」には、ソーロー自身が含まれることも免れないという(14)。これが 20 世紀後半の旅人アビィの視点である。

この視点からアビィは、馴染んできたソーローのことばに思いをはせる。師のことばには、思考が刺激され、共感を覚えるものが確かに少なくない。たとえばつぎのような珠玉のことばである。

"That government is best which governs not at all." (14)
"I never found the companion that was so companionable as solitude." (18)
"Emerson is too much the gentleman to push a wheelbarrow." (19)
"Reality is fabulous; be it life or death, we crave nothing but reality." (20)
"The hero is commonly the simplest and obscurest of men." (23)
"Rather than love, than money, than fame, give me truth." (24)

権威を嫌うソーローの意識、独立自尊への願望、現実的生の重視、真理や真実への志向等に対して、アビィは十分に敬意を示す。「生の意味(the meaning of life)」(28) を求めたウォールデン湖畔の体験、それを語るエッセイの詩的秀逸さ、豊かなユーモアの感覚、これらに対してもアビィは深い敬意を示す。しかし、「すべての権威」を疑うアビィは、おそれることなく先師の「亡霊」と対話する。

なるほど「すべの自然が私の花嫁 (All Nature is my bride)」(33) ということばは美しい。しかし、生涯妻を娶らなかったことは、自然人としての生の限界を端的に示すものではないのか。「退屈人間 (an intolerable bore)」(21)「こそこそ人間 (skulker)」(31)というホーソーンやスティーブンソンの評も、これと無関係ではないのではないか。「分別を持った人間はいかなる生き物も殺すべきではない(No humane being...will wantonly murder any creature)と一方で言いつつ、他方で、荒野で生きなければならないとしたら「狩猟や釣りはやはり避けられない(I should become...a fisher and hunter in earnest)」(47) とするのは、矛盾ではないのか。ソーローの時代は、総人口が 2400 万、その 6 分の 1 が奴隷の時代。産業化が緒についたばかりの農本主義の時代。その時代の森や川での体験、それも東海岸での体験は、果たしてどのような意味を持つものであったのか。十倍の人口と、そのすべてが奴隷に等しい 20 世紀後半の世界、産業化や商業化が激しく進行した現代社会から見れば、果たしてどれほどの意味を持つものであったのか。当時の大衆が囚われていたという「静かな絶望(quiet desperation)」(38) とは、何か。現代を覆う「騒々しい絶望(unquiet desperation)」(39)と比べれば、どれだけの意味を持つものであったのか。

「亡霊」ソーローは現実のことばは発しない。発するのは、書物として、日記として残されたことばである。そのことばを反芻するアビィは、愛するポケット版の著者ソーローを次のように規定する。

Thoreau was our suburban coyote. (38)

アリゾナ州ツーソンの街ではペットとして犬を飼う家庭が多いという。この街での生活体験を持つアビィによると、砂漠に囲まれたこの街では、夜になるとしばしば砂漠のコヨーテが潜入し、ゴミをあさり、ペットを襲い、家畜を殺す。このためツーソンの街では、騒々しくも緊張をはらんだコヨーテと犬の対峙がしばしば生じるという。からかうように余裕を持って威嚇するコヨーテと、砂漠の仲

間に惹かれつつも、恐れのため足がすくんで動けない恵まれた宅地の犬との対峙である（同)。アビィにとってソーローは、このコヨーテに等しい。

11 月の小春日和の中、6 人のパーティは、約 10 日間をかけてグリーン・リバーを下る。赤い岩山に深く刻まれたラビリンス・キャニオン、スティルウォーター・キャニオン、キャタラクト・キャニオン、パウエル湖を経て、最終目的地ハイト・マリーナに向かう。その間アビィは、川の上で、川縁で、テントの中で、夜となく、昼となく、「亡霊」ソーローと対話を交わす。結果としてアビィは、先師ソーローを「コヨーテ」として位置づける。生前ソーローは、マイナーな作家でしかなかった。アビィはこのことも指摘する。エマソン、ホーソーン、オルコット、チャニング、アービング、ロングフェロー、ホームズ。これらの作家の影にほとんど隠れた存在でしかなかった。しかし、20 世紀後半のアメリカで年ごとに存在感を増しているのは、間違いなくこのソーローである。「産業主義、アーバニズム、軍国主義(industrialism, urbanism, militarism)」にアメリカが突き進めば進むほど、ソーローの目指したものは「ますます痛切かつ強力に迫り来るものとなる(the more poignant, strong, and appealing)」（36）とアビィは捉える。

生前ソーローはアメリカ南西部を訪ねることはなかった。しかし「亡霊」ソーローのことばは、現在でも砂漠に響くことばである。アビィの見るところそれは、豊かに満ち足りた現代アメリカ社会に警告を発する声、アリゾナの砂漠に響くコヨーテの声に他ならない。

4. 場所の感覚

メルヴィルの *Moby-Dick* の語り手イシュメイルは、12 月のある日、大都会ニューヨークを後にして旅に出る。目的地を海と定めたこの若者は、捕鯨船に乗り組み、大西洋を南下し、インド洋を経て、太平洋へと向かう。この間、この若者は、船上の人間世界、自然の世界、海の世界を観察し、思索する。思索するイシュメイルは、海と陸の関係について興味あることばを記す。海と陸の関係は、人間の内面世界と類似したものであるという。理由は次の通りである。

> For as this appalling ocean surrounds the verdant land, so in the soul of man there lies one insular Tahiti, full of peace and joy, but encompassed by all the horrors of the half known life. (Chap.58)

平和な緑のタヒチ島とそれを取り囲む恐怖の海。心の中の平和な世界は未知の恐怖の世界と共存する。イシュメイルが観察するエイハブ船長もこれと無縁ではない。船長にとって白い鯨は、緑の島を脅かす恐怖の海に等しい。巨大な鯨は己の抹殺を図る強大な力を秘めた「壁(wall)」(36 章) であり、「代理(agent)」(同) であり、「悪意(malignity)」である (41 章)。鯨はこの象徴である。この鯨に対し、エイハブは「アダム以来の全人類の憎しみ (whole race from Adam down)」(同) を込めて反撃を試みる。エイハブの闘いは歴史や文明や文化との闘いでもある。イシュメイルはこの次第をつぶさに観察する。

エイハブ船長の姿は「亡霊」ソーローの姿を想起させる。ウォールデンの湖畔からニューイングランド社会に警告を発するソーローは、ツーソンの街に警告を発するコヨーテであり、同時に「産業主義」「アーバニズム」「軍国主義」の社会に警告を発するコヨーテである。この吠え声は、歴史や文明や文化を射程とする点で、鯨に対峙する片脚の船長のそれと重なる。ところがこの姿は、語り手アビィにもほとんどそのまま引き継がれる。

ユタ州のアーチズ国立公園で管理人として働くアビィは、ある日公園を訪れたさる旅行者に自分の「砂漠の思想 (desert thoughts)」(*Desert Solitaire*、244) を披露する。ところがアビィはその旅行者から、文明や科学を否定する者として厳しく糾弾される。予想外の糾弾に夜を徹して語り合ったアビィは、自分の「砂漠の思想」が、「人間(mankind)」や「科学(science)」や「文明(civilization)」を否定するものではないことを知る。否定するのは、「人間中心主義 (anthropocentricity)」であり、「科学万能主義 (scientism)」であり、そして「文化(culture)」である(244)。

1967 年の 5 月から 10 月まで、アビィは、グレンキャニオンダムのあるコロラド川で勤務する。ダムの近くのリーズ・フェリーの公園管理人としてである。求められた仕事は合衆国最大かつ最新のダムの管理である。パワーボートに乗ったアビィは、巨大なレクリエーション・エリアでもあるこのダムを 23 マイルにわたって管理する。グレンキャニオンは 8 年前にボートで楽しく下ったことのある川である。しかし、勤務した最新のダムの世界は、かつての川の姿を少しも留めていない異様な世界であった。「ダムがなければグレンキャニオンは昔の美しさを取り戻せるだろうか (If dam removed, could Glen Canyon recover its former beauty?)」(Cahalan, 108)、アビは自問する。2 年後の 1969 年 6 月、ノースリムの展望台からグランドキャニオンを見下ろしたアビィは、2 年前に自問したことばと同じことを反芻する。ただしこの時の反芻は、具体的行為者としての強い

意志を内在させるものとなった。

> Glen C. ? Gone---but could be recovered. The dam is obsolete, should be removed. (*Ibid.*)

アビィの代表作 *The Monkey Wrench Gang* (1975) はこうして生まれる。ヴェトナム帰還兵 Hayduke はグランドキャニオンのサウスリム付近に押し寄せる観光客の車の群れを眺める。この地を「聖なる地(the holy land)」とみる帰還兵にとって、神聖なキャニオンランドへの車の進入は「道徳律(a higher law)」に触れる不法行為でしかない(27)。したがって、これを許している人工建造物としての橋は、「即刻、破壊されなければならない(Gotta remove that bridge. Soon.)」(同)。これが帰還兵の結論となる。

破壊志向の帰還兵に3人の仲間が加わる。大学教授とその女友達、そして川下りガイドである。四人は破壊志向の一点で結ばれる。荒野のギャングと化した四人組は、露天掘り現場の巨大機械類を破壊し、発電所を攻撃し、コロラド川を塞いで車を対岸に送り込んでいるダムの破壊を目指す。四人のこの衝動に通底するのは、大学教授の意識を支配する次のような視点である。道路脇のビルボード破壊を正当な行為として繰り返すこの知識人の脳裏には、「荒野」の行く末に関わる次のような感覚がある。

> The wilderness once offered men a plausible way of life. Now it functions as a psychiatric refuge. Soon there will be no wilderness. Soon there will be no place to go. Then the madness becomes universal. And the universe goes mad. (63)

社会の「狂気(madness)」を防ぐための「荒野(wilderness)」の保存。人間が本来「向かうべき場所(place to go)」の確保。この視点から四人組は「メガロマニアカル・メガマシーン (megalomaniacal megamachine)」(167) の破壊活動に突き進む。すなわち「テクノロジー支配の巨大社会(megamachine)」の破壊である。ダムを壊し、橋を壊し、線路を壊し、ブルドーザーを壊し、道路脇のビルボードを手当たり次第に破壊する。これはすべてこのためである。この行為は、一般社会の視点から見れば、一種の反社会的テロリズムである。ただし、このテロリズムには、四人組が前提とする一つの約束事がある。「人間には暴力を振るわない

(no violence to human beings)」(170)というものである。「荒野」を維持するための非殺戮のテロリズム。一種の平和な破壊活動。

アメリカ南鹿部、開発の進むコロラド川流域という一つの舞台で繰り広げられる危険かつ奇妙な破壊活動は、「荒野」に関わるこのような特質を秘めるものであった。

むすび

陸の世界を後にして海に出た若者イシュメイルは、「緑のタヒチ島」を精神の安寧の場所として規定する。安寧を求める者はこの場所から歩み出てはならない。この場所を後にして「海」に出る者は、その世界に遍在する「恐怖」と闘う覚悟をしなければならない。エイハブ船長と鯨との闘いはその一つの具体的事例である。エイハブが闘うのはしかし白い鯨だけではない。「科学！呪われよ、虚栄の玩具よ(Science! Curse thee, thou vain toy)」(118 章)。隻脚の船長は「科学」という抽象世界とも対決する。その具体的姿は自分の航海を導いてくれている四分儀に他ならない。この闘いに挑む船長の破滅の次第をイシュメイルは観察する。

緑に覆われたアパラチアの地を後にしてアビィはアメリカ南西部の砂漠地帯に向かう。イシュメイルとの対比で言えば「緑のタヒチ島」を後にして砂漠という「恐怖」の「海」に向かう。しかし、アビィにとってこの場所は、必ずしも「恐怖」の世界ではなかった。なるほどアパラチアを後にしたアビィは「新しいアメリカの内部の移民(an internal emigrant in this new America)」としての自分が「場所を失った人間(a displaced person)」(*Desert Solitaire*, 235)であることを自認する。「独り者で、アウトサイダーで、草原の野蛮人(a loner, an outsider, a barbarian from the steppes)」(*Abbey's Road*, 193)であることを自認する。しかし、訪れた砂漠の世界、荒野の世界は、むしろ「緑のタヒチ島」の世界であった。グレンキャニオンをボートで下るアビィは「子宮(womb)」に向かう「揺籃のような安心感(a sense of cradlelike security)」(154)に満たされる。

公民権運動やヴェトナム戦争で激しく揺れ動いた 1960 年代のアメリカで環境問題が次第に人々の意識にのぼり始める(Cahalan, 97)。レイチェル・カーソンの *Silent Spring* が刊行され (1962 年)、コロラド川にグレン・キャニオンダムが建設され (1963 年)、ワシントンでは Wilderness Act が制定され (1964 年)、1970 年には第一回の「アース・デイ (Earth Day)」が開催される。この意識は、その後さらに高まり、やがてグローバルな潮流となる。

1950 年代から「荒野」の生活を始めたアビィは、この流れに身を寄せ、「緑の

タヒチ島」を取り巻く「恐怖」の世界と対決する。「亡霊」ソーローを師とするアビィが選んだのは、さながら「科学」を激しく呪う 20 世紀のエイハブの道であった。

参考文献

Abbey, Edward. *Desert Solitaire: A Season in the Wilderness.* New York: Simon & Shuster, 1990.

----------. *Down the River.* New York: Penguin Books (A Plume Book), 1991.

----------. *Abbey's Road.* New York: Penguin Books (A Plume Book), 1991.

----------. *The Journey Home.* New York: Penguin Books (A Plume Book), 1991.

----------. *The Monkey Wrench Gang.* New York: Penguin Books, 2004.

Berry, Wendell. "A Few Words in Favor of Edward Abbey." From <*http://www. tipiglen. dircon.co.uk/ abbey.html*>

Cahalan, James M.. *Edward Abbey: A Life.* Tucson: The University of Arizona Press. 2001.

Callenbach,Ernest. "A Few Reflections." From <*http: //www.ecotopia.org/ehof/ abbey/apprec.html*>

Duryee, Kent. "Edward Abbey: A Man Hard To Talk About." From <*http: //www.desertusa. com /mag00/nov/papr/abbey.html*>

Embridge, Davis. The Appalachian Trail Reader. New York: Oxford University Press, 1996.

Melville, Herman. *Moby-Dick.* Vol. 6 of *The Writings of Herman Melville.* Evanston and Chicago: Northwestern-Newberry Edition, 1987.

Turner, Frederick. *John Muir: Rediscovering America.* Cambridge: Perseus Publishing, 1985.

（本稿は平成 16－17 年度日本学術振興会基盤研究（c）課題番号 16520129 の成果の一部である。）

（岩手大学教育学部英語教育講座）